

# 批評・紹介

佐竹靖彦著

## 唐宋變革の地域的研究

渡邊 紘 良

本書は著者既發表の論文十二に、書きおろし二本と序論・結論とを加えてまとめられたものである。既發表のものは後學を誘掖してきたものであり、本書には殆んど原形のまま収録されているので、いまだら紹介するまでもないのであるが、今回まとめられた機會をとらえて紹介し、いささか感想も記すこととしたい。まず本書の構成を示そう。

### 序論

#### 第一部 宋代の鄉村制度

##### 第一章 宋代鄉村制度の形成過程

##### 第二章 宋初郷制論

#### 第二部 華北地域の變革

##### 第一章 敦煌戶籍における戸口問題について

##### 第二章 唐末宋初の敦煌地方における戸籍制度の變質について

て

#### 第三章 陝西地方における唐宋金元期の地割制度

#### 第三部 長江中流下流地域の變革

- 第一章 杭州八都から吳越王朝へ
- 第二章 唐宋變革期における江南東西路の土地所有と土地政策

——義門の成長を手がかりに——

#### 第三章 宋代贛州事情素描

#### 第四部 四川地域の變革

##### 第一章 唐代四川地域社會の變貌とその特質

##### 第二章 王蜀政權成立の前提について

##### 第三章 王蜀政權小史

##### 第四章 唐宋變革期における四川成都府路地域社會の變貌

##### 第五章 田欽全寄進正法院常住田記

——碑文の作者楊天惠と田地の所在——

#### 第六章 宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題

### 結論

あとがき

### 索引

一見してわかるように、時期は唐より元まで、地域もほぼ中國の全域に及び、テーマは主戸・客戸等の戸籍に關するもの、移住と同族結合、地割その他の土地問題、政權の成立と役法その他の農村支配の問題、更に民兵（義軍）と民族問題、等と多岐にわたる。多くの課題に取り組まれた著者の勇氣をまず多とせねばならない。序論以下順に紹介していきたい。

序論で著者は本書のねらいを二つあげる。一つは中央政府から秘密結社に至る、この時期の「重層構造」を、地域研究によって把え

ること。一つはその重層構造を變革過程において把えること。つまり著者は「構造」という斷代的でしかも空間的な廣がりでもって把えなければならぬ課題を、それと矛盾するように思われる時間的な變化のなかで把えたい、というのである。この難題に著者はどのようにして當たろうとされているのか甚だ興味をそそられる。

第一部は第Ⅱ部以下の地域研究と異なり、鄉村制或いは鄉村支配の一般的研究である。第一章は唐の鄴保制から宋の鄴管耆制への變遷をたどり、地主的村落秩序の形成過程を論證しようとする。即ち鄴保・國保・村社・團貌・耆長・鄴管・鄉里・壯丁・里正等の資料を金石類、敦煌文書、地誌類より一つ一つ擧げ、統率關係・職務・管轄區域等について検討しつつ、宋の戸等制の成立に及ぶ。鄉村制度それ自體は、徵稅・保甲・裁判を目的とし、私的所有に直接關わるものではないが、唐に比し、宋の行政單位が廣域化してきたので、地主的村落秩序の形成を想定できるというのが論旨のようである。唐宋の鄉村制を網羅し、著者解釋の用語（地主的村落體制・村落結合等）が、資料用語の合い間に入り交じるので難解である。第二章は『太平實字記』の戸口・縣數・鄉數の記載のしかたを細かく分析されたもので教えられるところが多い。著者が得意とする統計處理により實字記研究を一步進めたといえよう。

第Ⅱ部の第一章と第三章が新稿である。第一・第二章は敦煌戶籍により、六朝より宋初に至る家族形態、戸口登録制の變遷を論ずる。第三章は金石類を細かく調査し、陝西地方の地割制を推定したものである。第一節は既に莊園の存在形態を示すものとして、周藤・日野兩氏によって検討されてきた會昌元年隴州の重修大像寺記の研究である。著者は所領の四至記載の中に頻出する

「南阡北陌」の阡陌は、東西に走る道路であらうとし、耕地の概形とその廣さを推測し、牛耕の可能性に説き及ぶ。概念圖を示されれば詳細な分析はより生かされるように思う。第二節以降は唐より元に至る長安の石刻資料、廣慈禪院莊地碑・重眞寺田莊記・京兆府提學所帖碑・凝眞大師成道記・京兆府麟學田記等に記載されている學田・寺田を分析し、長安における地割制を検討したもの。著者自身訪中し、現物または拓本により錄文を確認できたことが考證を強めている。特に長篇の提學所帖碑については、借地人の宅地幅が十尺、長くて三十尺程でしかないことから、碑文の地片記載の信憑性に疑問を呈されながら、宅地の長さについては、全體として一定の距離ごとに分けられることに注目し、幅が狭いのは操作が加えられ、地片の長さを倍増させる一方、幅は半減させたためではないかと推測する。同じ街巷で同じ長さをもつ宅地片を何例かあげてその可能性をさぐったのである。著者が言われるように都市の宅地は一定の奥行を前提とし、間口を課稅評價額としたとすれば、幅を狭く記載することは考えられることである。それを具體的に示されたことは貴重である。ただ二丈幅を最少單位とする地割制度が存在したといわれ、また「每一畝可蓋屋八間」の記事により、「一畝が八軒分の宅地と想定」されていたといわれるのはわからない。著者は更に借地面積の多寡により、都市住民の階級構成は、特權層三%、中間層二十七%、一般市民七十%とする。一見亂雑な借地面積の記載から一定の方向性を讀みとられた手腕は著者ならではの感がある。

著者の持ち味が最も發揮された箇所ではなからうか。

第Ⅲ部第一章は黃巢に對抗して組織された自衛軍團・杭州八都の所在地、都將すなわち鎮將の出自、軍團の性格等を問題とする。著

者によれば八都軍團は、通説の如き土團（農民軍）ではなく、傭兵集團であり、それを支えたのが土豪の財力とその結束であった。八都を基盤とした杭州の錢鏐が擡頭し、吳越王朝を形成する過程について見ると、湖州の李師悅と越州の劉漢宏が北方系の親軍を中心に軍事力を編成したのに比べ、八都には明確な中央軍が見当たらない。しかし錢鏐は同志を登用し、土木工事を起し、敵將または反亂軍の驍將を抱き込みつつその勢力を擴大させていった。著者の八都軍事力に関する研究は民兵一般への言及がないので疑義がないわけではないが、土着勢力を活用しながら勢力を固め、權力を確立するや地域から浮きあがった存在と化し、やがて宋朝に併合されるという説明は興味深い。ただ宋朝併合後の役法に觸れられるのであれば、別に節を立て兩浙地域の鄉村統治の特殊性について、第一部と關連させつつ、掘りさげてはしなかった。そうすれば著者のいう地域の重層構造を變化のなかで把えるというねらいにかなうからである。第二章は江西の累世同居（義門）の研究。江西にその記事の多いのは、唐開元年間以降、新設縣がこの地に集中したことによって確かめられるとし、唐初儀鳳二年（六七七）の潤州仁靜觀魏法師碑の碑陰全文を今回新たに加え、村ごとの同姓聚居のさまをうかがい、主客戸統計に及び、最後に南唐潘佑の均田制的土地政策「民田並以見佃人爲主」について、地主官僚徐鉉らとの對立の中で把え、南唐が宋に併合される次第を述べる。地域全體の特徴を掴みたいという著者の意欲は買うものの土地所有關係、同族結合等、地域の抱える問題全てと背後にある權力の性格、土地政策をも抱え込み、あまりにも多岐にわたる。地域研究はどうあるべきか、いろいろ考えさせる論文である。權力の問題をはじめとし、個々のテーマは一論

文のなかで扱うには重すぎはしないか。例えば宋に併合された南唐の政策を反動的と斷じてよいであろうか。地方政權のめざすところが宋朝のそれと同じかどうかまず検討されなければならないからである。第三章は私鹽商の活躍で知られる江西贛州地方を特にとりあげ、開發に伴う現地少數民族との摩擦、移住民の戸籍上の扱い方、私鹽の流通とその擔い手、贛寇の特色等を檢證しつつ、訟風盛行の背景をさぐろうとしたもの。

第Ⅳ部四川地域の變革に移ろう。第Ⅳ部は本書の半分を占め、六章のうち第四・六章以外は近年の成果であるから、その重みがおのずと知られよう。第一章は唐代四川を地域性と軍事面より追求する。第一節ではまず唐より宋に至る州別戶口統計により、各州戶數の四川内における比重の變化を見る。長江流域各州の戶數は唐中期に少數民族を除外したため減少するものの、唐末より宋にかけては比重を増してくること、一方、統計には表われないが、四川盆地内部の蓬・渠・果・合州には、唐初より大量の僑戶が存在したこと等を明らかにする。第二節では唐代四川劍南節度使管下の團結兵と韋君靖軍團とを問題とする。まず三萬人餘りの四川團結兵のうち、黎州・雅州のそれは羌族であり、南詔進攻（八三〇）後、李德裕によつて築かれた雄邊子弟も、精兵とは別に黎雅地區より選ばれた民兵であり、更に邛州蠻阡能の亂（八八二）に少數民族が同調したのは、漢化される直前の動きであり、それ以後は少數民族の有力者が統制力を失い、兵力の結成はなくなるとする。いずれにせよ、成都の兵力は北兵（精兵）以外に、少數民族の國民皆兵的兵力を基盤としていたのに對し、昌州西北十里の地に築かれた韋君靖軍團は豪族集團であり、兵力の大部分は流民を吸収したものであった。韋君靖

碑文に兵力の出自を語るものはないが、第一節の考證及び『元豐九域志』の一鎮あたりの戸數から想定されるところ。考證の妥當性を云々することはできぬが、少數民族が軍事力構築に與つたことに注意しておきたい。

第二章は王建が四川に政權を樹立する以前、黃巢に荷擔し私鹽商として活躍したこと、活躍の場となった山南東道、王建集團の構成等について述べる。第一節は王建をめぐる人間關係を正史及び說話より發掘して私鹽販賣の時期を考え、また王建の郷里を許州長社縣ではないかと推測する。内容豊富な說話は末尾に一括して引かれるなど、論述に工夫がほしい。第二節は山南東道の地域的性格を、戸數の増減、鹽法、藩鎮、特に唐隨鄧節度使下の精銳部隊・山河子弟の活動、商業ルート等よりさぐる。第三節では、王建集團の基盤が、假父子義兄弟關係によつて築かれた忠武軍内の祕密結社の仲間結合にあったとする。

第三章は王建政權の成立過程及び政權の基盤、構成をテーマとする。第一節では、四川の名望家は中央の唐朝の秩序への志向が強いのであるから、政權がその支持によつて成立したとする土豪政權論は認められず、王建支持の土豪は實は少數民族の有力者であつたとし、八九一年八月の成都征壓時の在地有力者の反撥にふれ、翌年の彭州攻撃より九〇二年八月の王宗濬謀殺までをたどる。第二節は九〇四年二月、墨制除官の制により官僚の任命權を手にした王建が、官僚の母體をどこに求めたかを問題とする。政權の擔い手は軍政面では宦官の嚴遵美、舞僮の唐道襲、假子で皇太子となつた王宗佶の三人であつたが、唐道襲と皇太子の間はよくなく、唐は王建に殺された王宗佶の後の王宗懿とも對立し、九一三年王宗懿主催の七夕の

宴をクーデターと誣告して逆に殺され、王宗懿も王建の軍隊によつて殺される。著者はこの政變の舞臺を一つ一つ考證された。一方、王建は唐の名臣舊族を採用し政權の體裁を保たんとしたが、財政・民政は實質的に縣令クラスの官僚と、在地有力者よりなる吏人層によつて擔われていた。彼らと軍人を結ぶものは何もなく、王蜀政權は王建の死とともに崩壊せざるを得なかつたとする。

第四章は比較的早期の論文であり、若干の訂正及び追加がみられる。テーマは唐初より宋初の王小波李順の亂に至るまでの成都周辺の地域的變貌である。第一節は成都府が唐初に生産力において群を抜いていたが、唐末・五代にそれが周邊に波及していったことを、成都府路内各州の戸口比重の變動より推測する。いうまでもなく、グラフは「成都府路三地域……」と標記すべきである。第二節は、蘇洵の衡論下田制に描かれた隸屬的な主佃關係は四川の實態とかけ離れたものであることを、任淵の「雙流昭烈廟碑陰記」にみられる水利工事の際の協業關係の變化によつて示そうとする。しかし碑陰記自体は主佃關係に觸れたものではない。第三節は四川の土豪支配とその變質をみようというもの。唐末邛州の阡能、宋初の王小波・李順、王均等の反亂の際の民兵の結集のしかたを通して議論するが、土豪支配と民兵の問題がどうつながるのか、説明に用いられる、一圓的支配と領域的支配、團保的秩序と土團的秩序等の違いはどこにあるのか等々、疑問點が多い。第四節は大家族的同族體制の崩壊と題し、眉山縣の人孫抃・孫朴の家の遺産争いを具體例として挙げる。附隨して贅婿の盛行、效力を失つた親鄰先買權の問題等に言及された。第五節は丹喬二氏が發掘された「正法院常住田記」の分析である。舊稿は正法院が主張する所有權の妥當性をもつばら問

題とされていた。今回、碑文の全てとその訓讀を追加されたので、碑文自體の解説を施した次の第五章の論文をまず読んでおきたいところである。著者は正法院の主張は時代遅れで一般に認められるものではなかったが、蔡京の一言で認められることになり、農民側は敗れたのであるという。碑文そのものについては、「姑く縣官に歸す」とは官田に改めたこと、「旁近」は「旁戸」に近い内部の農民ではないかと新しい解釋を出された。しかし周藤氏が、所領内の農民は兵士の歸農したもので、豪民に近い力をもっており、四川地方一般の大土地所有と同列に論ずるわけにいかない、と述べられたこと（『宋代史研究』四五二頁）への言及がない。著者のいう「小農經營の全面的自立」の論據が本節にあるのではないが、それに關わる資料として本碑文を用いているのは言うまでもない。農民の資料ではないという見解の是非に觸れられるべきであろう。特に本章第三節において著者は土豪とその下の土國を問題とされた。「兵士の歸農」はありうるのか否かお聞きしたいところである。

ここで「旁戸」についても一言しておきたい。「旁戸」＝役屬佃戸説に對し、宋代少數民族問題を専攻された河原正博氏が、「旁戸」とは棄柵の附近の熟夷戸で實質的には土豪ではないかと提議されたのは周知のことである（『漢民族華南發展史研究』）。それに對し、著者を始めとし多くの研究者は關心を示されないが、日野開三郎氏のみは、「旁戸制豪民とその小作人との關係」、「旁戸制大土地所有」なる表現を用いられている（『唐宋五代初自衛義軍考』上篇、三六二頁）。日野氏は『唐代先進地帶の莊園』を刊行され、續けて四川地方を中心とした莊園研究をも、目論まれていた。不幸にしてその刊行を見ずに物故されたので、氏が右の表現によって「旁戸」を豪

民的存在と考えておられたのかどうか確めようがない。日野氏の研究によれば城旁（傍）子弟（民兵）なる言葉がある（『日野開三郎東洋史論集』卷一、二三三頁）。「旁戸」についても軍事的色彩の濃いことを感ぜずにはおれない。

第五章は前章で取りあげた「正法院常住田記」の執筆者、莊園の所在地、立地條件等について考證したものの。第一節で碑文の作者楊天惠の身邊を洗い、蔡京及び新舊兩黨の争いとの關わりをみつ、その人物像を浮きぼりにし、また碑文作成を求めた「汝南周公」は周敦頤の次子周燾ではないか、碑文自體は楊天惠の蔡京に對する詫び入れであろうという。楊・蔡・周の交渉についての研究には興味がつきない。第二節は碑文中の昇遷・會仁・學射・萬歲等の地名を考證し、學射山の蠶市にふれ、莊田が萬歲池の灌溉水系下にあったとする。第三節では規模において正法院をしのぐ昭覺寺領常住田の成立過程、規模と四至、灌溉施設、水利工程、立地條件等を關係資料よりつきとめ、正法院領と比較する。

第六章も第四章同様、比較的早期の作品であり、今回前後を入れ換え、小見出しをつけ、書き改められたところも少なくないようである。夔州路の民族問題、農業生産の在り方、商税及び主客戶統計、少數民族の社會構成と支配構造にふれつつ、皇祐夔州路官莊客戶逃移禁止令及び南宋の修正令を考證しようというもの。第一節は夔州路施・黔・渝三州と梓州路瀘州の少數民族の漢化過程・焼畑耕作・集落の戸數、漢族との武力衝突と征服による共同體の分解、衝突の際の漢族・少數民族雙方の兵力動員方法、少數民族首長の動き等、民族問題を多角的に検討する。盛りだくさんの資料をあげられ、一節としてはかなりの長編である。第二節は夔州路佃戶制に關

する諸研究をあげたのち、當路の一般的性格を戸口統計その他によつて把える。四川三路に比し生産力は極めて低く、科擧官僚を出さず、各州の鎮數は二つ止まりで商品流通は豪民に委ねられ、一戸當りの免役錢徴收額は三路に比し多いが、一戸當たり墾田額は極端に少なく、未登録田地の存在を推測させる。保甲編成では客戶を除外したが、主客戶統計では客戶率が全般的に高い。成都府路で逆に客戶率が低いのは、經營を獨立させた佃戸が主戸として登録されたためであろうとする。ついで「皇祐夔州官莊述移法」と南宋における修正令のねらいについて問題とされる。右の法令に述べられている佃戸は隸屬的であり、時に武力を背景に土地に緊縛されるのであるが、著者はそれを大經營の解體によつて自立せんとする農民を、地主が相互に獲得せんとして再收奪したものと解されるようである。莊園より自立し、商品生産に巻き込まれながら、保護を失つたため、逆に顛落の度合を強めることになった再版農奴的存在であるという。したがつて法令は、自立農民の再收奪を防ぐのがねらいであつたとする。ユニークな解釋ではあるが、著者の抱かれた農民像は、本章で述べて來られた夔州路の農民のものではない。商品流通は豪民に掌握されており、農民を巻き込んではいないのである。そもそも法令のねらいところを把えるには、夔州路の官田・民田雙方の在り方とその對策を比較検討することがまず求められよう。著者はその作業を舊來の研究成果に委ねたままき、結論を急がれたようである。資料が少なく難しいとは思ふが、著者が第一節で考證された少數民族有力者層の動向をふまえるならば、官田・民田對策が奈邊にあるか把えられるのではあるまいか。

以上第Ⅳ部で著者は、唐宋五代における地方政權の形成過程及

びその基礎となる軍事力の構成、「正法院常住田記」の内容とその他のない、夔州路における漢族・少數民族の葛藤等についてそれぞれ詳しく検討された。宋朝の四川支配が缺けているという不満は残るが、四川の歴史像を豊かにした功績は大きいと思う。

最後に全體にわたる感想を二、三記したい。本書全編にわたつてみられる特色は、唐宋の戸口統計を活用した人口動態の把握にある。新縣の設置と人口比率の變化、主客統計・商稅額・墾田數等の分析を基礎に、移民と開墾、流民とその收容、土着・外來の問題、民兵・傭兵問題に見當をつけ、大局的觀點よりその地域の性格を存きばりにするという方法である。特に主客統計とその意味をたえず問い、地域によつて主客の規準が異なり、單純に主佃關係を示すものではないことを地域ごとに示されたことの意義は大きい。

問題は統計資料による大局的判斷を肉附ける方法にある。序論の紹介において二つのねらいはあい矛盾するのではないかと指摘したが、著者が實際に積み重ねてこられた研究をみると、二つ目の變革過程を把えるというねらいは、預め前提として据え置かざるをえなかつたようである。「特定地域の變化を追求し、その個性と特質を確定する」(四四一頁)のが著者の方法であつた。變化とは唐宋の變革であり、細かく言えば小農自立、一圓の大土地所有の崩壊である。地域ごとにあるはずの變革を見つめていけば、自ら地方の特質は把握されるという立場である。いうまでもなく變革があるかないかは現代の判斷であり、史料自體は何も語らない。勢いさまたまな豫斷・假説を用いざるをえない。本書が難解なのはそのためである。しかしながら、豫斷・假説を用いることは著者のみならず、戦後の歴史學が多かれ少なかれ依據した方法であり、あながち責め

られるものではない。唐宋變革という假説があればこそ新たな資料は發掘されてきたのである。ただ本書においていささかそれを前面に出しすぎたにすぎない。ともかく著者は今回舊稿を改めることなくそのまま收録され、戦後の中國史研究の證言臺に立たれた、ということができるのではあるまいか。

次に四川を始めとする諸地域の把え方を問題としたい。華北・四川の地域研究は唐宋にわたるものの、他は宋に限られるから、地域へのアプローチはさまざまである。地域によっては軍事問題或いは民族問題が中心となる。そのようにアプローチはさまざまではあるが、共通するものは變革面を明らかにすることである。そのため、地域は動きのなかでのみ把えられることになり、動かざるもの、當たり前のことはともすると捨象されざるをえない。それは何かといえば中央との關係、特に國家の地方支配の問題である。宋は統一後、文臣の派遣と吸收により地方における既存の勢力を削減しようとした。そのような中央の締めつけは、官僚制、税制等、あらゆる側面に及んだはずである。特に宋初のそれは決して固定して動きのないものではなく、變革そのものであった。その意味で、中央を見ずに地方を語ることができない。それが四川研究に缺けているのではないかとこだわるわけである。もちろん著者自身十分承知のこととて、結論において國家支配そのものを念頭におくようになったのは吳越王朝の論文（第三部第一章、一九七八年）に始まるといわれ、それまで抱いていた土豪政權論の再檢討に入られたという。確かに本書に主客制、戸等制、鄉村制への言及はあるものの、制度史あるいは支配理念そのものの研究はない。中央とその地方支配の關係は、簡単に云えば原理とその適用ということになる。適用はさ

まざまな展開を示すから、それ自體追求されなければならないが、原理を忘れては自らを見失う恐れがある。普遍的なものあるいは全體にわたるものにある程度配慮してはじめて地域の特長性は掴みうるであろう。その意味で地域研究は中央と地方の往復運動といえる。しかし言うは易く行いがたい。

以上本書に導かれ地域研究について欲ばったことを云わせていただいた。著者の視角あるいは方法のみを問題とし、ようやく著者の出發點に到達することができた。少しでも本書理解のための道しるべとなれば幸いである。緻密でしかも豊かな實證的成果についてはこれより更に學んでいきたいと思うものである。

A5判 三三・七四五頁 索引一七頁 二〇、〇〇〇圓  
一九九〇年二月 京都 同朋舎出版